〈最終講義〉
いま在る意味

茂　洋

Summary

THE SENSE OF BEING

Hiroshi Shigeru

The way to find the sense of being is related to the contemporary way of thought, i. e., philosophical, theological or artistic thought. At present we face the problem how to mediate the nineteenth century thought, Romanticism and the twentieth century thought, Existentialism.

A fine definition of Romanticism is, "In every finite the infinite is present, and the finite is in the infinite as a potentiality." Existentialism is the movement against Romanticism, the universal synthesis.

We must try to mediate these two possible ways of looking at man, i. e., the essential goodness of man and man's fall into the conditions of existential estrangement. We must see both sides, man's essential nature, expressed in the paradise story, and man's existential condition, under sin, guilt, and death.

I'd like to insist how important to accept the whole human being with both essential nature and existential nature. It means the acceptance in-spite-of-unaccepted. We can get the thoughtful idea from Pascal, saying, "it is great for human being to know the misery of human being." This is the meaning of the Beatitudes and, also, of the human being.

この講義は最終講義と名付けられていますけれども、もちろんこれは私の人生の最終講義ではありません。神戸女学院大学の専任でいる終わりを記念する講演ということですので、この機会に私自身がこれからどう考えていくかという方向づけについてお話してみたいと思います。

主題を「いま在る意味」といたしました。これは、実際にはいま在る不思議さということについてお話をしてみたいのです。言葉をかえますと、存在感 the sense of being ということになります。それは、たとえばあなたのいまの存在感、一人の生まれたばかりの赤ちゃんの存在感、痴呆の老年の方の存在感ということになります。

思想的にいいますと、これは哲学の存在論 ontology の分野に入ります。哲学の存在論というのは、存在の構造の分析ということを目的としています。しかし、私は単に存在の構造の分析だけでは満足出来ません。この存在の構造の分析の助けをかりながら、いま生きている一人の人間の意味を問いたいと考えているわけです。これが神学の立場であると思います。そういうことで「いま在る意味」という題を選びました。

1　存在についての二つの理解

このいま在るという意味での存在を考えますと、そこには思想的に二つの大きな流れがあります。この流れは思想全体の流れと同じです。思想の流れ、とくにこれは十九世紀以降現在まで二百年間の思想の流れからみますと、二つの大きな流れがあります。一つは十九世紀思想の代表でありますロマン主義、ロマンティシズムという考え方、それからもう一つは、そのロマンティシズムに反抗した二十世紀の思想、主として実存主義と呼ばれている考え方であります。現在二十世紀後半になりまして、そしてやがて二十一世紀を迎えようとしている現在の思想、あるいは現代の思想というのは、このロマンティシズムと実存主義とをどのように組み合わせるかということが問題になっているのです。

この二つの思想の組み合わせを論じる前に、そのそれぞれの思想はどのようなものであったかということについて少しふれてみます。十九世紀思想の代表ロマンティシズムというのは、一概に述べるのは少し難しいのですけれども、哲学者のヘーゲルであるとか、神学者のシュライエルマッヘルという二人の人によって最もよくあらわされ、そして非常に綿密な展開がなされております。しかし、そういう難しい議論はさておいて、このロマン主義の特色というのを一言でいえばどうなるのかということを考えてみますと、それは、「限りあるいかなるものの中にも無限が在る」という大変ロマンティックな考え方なのです。どんな存在、どのような人の中にも無限が潜んでいる、永遠性があるという意味なのです。

ヘーゲルという人はこの論理を弁証法という方法で展開しました。弁証法を何度も何度も繰り返していきますと、必ず無限に到達するということになります。その過程は大変複雑なのですけども、そうしていくうちに、例えば、真理の極地とか、美の極地があらわされるということになるわけです。

このロマンティシズムのロマンティックな主張というのは、その後非常にはげしく批判され続けて百年経ちました。それでもやはりロマン主

義の主張というのは、どうしても否定しつくすことが出来ないばかりか、現在もっとこのロマン主義のよい部分、精神的な部分をより正しく理解するべきであるということになっております。とくに、いつも本来あるもの、真実であるものを求めていく、と言う主張です。

このヘーゲルを徹底的に批判いたしましたキルケゴールは、このようなロマンティシズムを有限と無限の連続性を安易に述べすぎていると言って、批判し続けました。ですから彼の主張によりますと、ロマン主義の特色は、限りあるものと無限なるものとの連続性、ということになります。つまり「限りあるものが限りのないものと連続しているところがある」という主張であるわけです。

皆さんが余りにも一生懸命聞いてくださっていますので、ちょっと脱線をいたします。私の授業は脱線の方が面白いというので定評なのですが――。このロマン主義がその後どうなったかといいますと、この研究だけでもとても楽しいのですけれども、十九世紀後半、後期ロマン主義という時代となります。面白いことに、このように熱心に永遠的なものを求めたにもかかわらず、実際は大変退廃的なものになりました。悪魔的なものというのが、十九世紀後半のロマン主義の特色になっているのです。これを示すとてもすばらしい街があるのです。それがウィーンなのです。ウィーンでハプスブルグ家の伝統の上にすごいロマン主義の展開があらわれましたが、その中でその退廃的なムードをいち早く察知した人たちが何人かおりました。皆さんも御存知の画家のクリムト、心理学のフロイト、そして哲学者のヴィトゲンシュタイン、それに建築家のオットー・ワーグナーたちです。こういった人たちがカフェに集まりながら、このロマン主義に対する批判というものを始めて、そして一つの文化を成立していきました。そういう点で、世紀末――これは十九世紀末のことを言いますけれども――それをみる最高の街がウィーンということです。このことを話しますと、時々学生が、「一緒にウィーンに行きません？」といってきたりします。

本題に戻ります。十九世紀半ばからこのロマンティシズムに対する激しい批判が起ったということは、先程申した通りです。そして、その代表の一人がキルケゴールです。この批判の過程というのもなかなか複雑なのですけれども、簡単に言いますと、キルケゴールが主張しているように「限りあるものは決して無限とは連続しない」という点なのです。つまり、限りあるものと無限なるものとは非連続である、と言う主張になるわけです。

これを言葉をかえて説明してみますと、私たちは、例えば、子供の成長でも、あるいは、自分の歩みでも、本来あるべきものに向かってすすんでいく――言ってみればこれが本質的な歩みなのです。ロマン主義が主張している点なのです。けれども現実にはそのあるべき姿の通りにならないと言う現実を、私たちは知るわけです。あるべきものからかけ離れていっている部分が私たちの中にある、ということになるわけです。これが実存という言葉の持っている意味なのです。残念なことに日本語、あるいは、中国語のこの実存という字はそういう意味を全く感じさせないのですが、これの語源であるラテン語は、非常に明瞭にこの世界をあらわしています。Existence という言葉は、ラテン語の ex という字と sistere という二つの言葉の合成語になっているのです。ex という

のはout ofという意味です。〜から外側へという意味で、それに対してsistereというのはstanding—いま在る位置という意味になります。そうしますと、existere—existenceという言葉は、「在る状態から外側にある」という意味になるわけです。実存という字からはこういう意味をとることはできませんね。ですからひょっとしたらこの言葉は、疎外—estrangement—という言葉の方があたっているかも知れません。要するに、人間は本来あるべきものを求めていくのだけれども、本質を求めていくのですけれども、現実にはそのようにならない疎外の状況をもっている、ということになります。これが実はロマンティシズムへの批判の思想で、現在迄百年間続いて来ているわけです。これを一般に実存主義—existentialism—と呼んでいます。ここに挙がってくる人たちの名前を言いますと、キルケゴール、フォイエルバッハ、カール・マルクス、フロイト、ニーチェなどの思想家の名前がずらりと並んでくるわけです。

このように二十世紀の思想は、十九世紀ロマンティシズムのいわゆる本質を求めた思想への批判に終始したわけです。そこで本題に立ち帰りますけれども、「いま在る意味」、つまり、存在というものを捉えようといたしますと、どうしても十九世紀のロマン主義がいうように、本質を求めて歩む要素と、そして今申しましたように、そうならない状態をあらわしている実存主義の主張というこの両面を受けとめなければならないということになります。問題はそれをどのようにつなぐかということになるわけです。

その次に入ります前に、この二つの考え方が聖書の中にあらわされていないかと見てみますと、実は創世記の楽園物語を考えてみますとよいような気がします。楽園の中にいきるアダムとイヴという状態は、いわば本質的なものの中にある存在ということが言えるのではないでしょうか。神から創造されたままの存在、それは私たちの中にもあるわけですね。それで、ある人はこれをdreaming innocence夢見心地の無垢と訳しております。ところが楽園物語は、ご存じのようにアダムとイヴは楽園から追放されました。つまり、本質的なものの中だけでは生活出来ないで、その楽園から追放され、これはいわば実存的な姿をあらわしているように思うのです。そしてアダムとイヴはエデンの東に住んだ、ここでジェームス・ディーンが出てくると面白いのですが、聖書にはでてきません。ただ創世紀三章二十四節に「エデンの東に住む」という言葉が出てきております。何となく楽園追放という言葉は、デューラーもそうですけれども、人間の罪が神から指摘されて、非常に嫌悪しながら出ていく風景が一般的なのですけれども、シャガールの楽園追放の絵を見ますと、まるでイメージが違うのです。非常にきれいな緑の芝生の上をアダムとイヴが新婚旅行の服装をして、手をとって楽しそうに追放されているのです。神から創られる喜びという本質的な喜びと、神から離れる自由という両面がここにある、というのが現代のこの理解ではないかと思うわけです。

2　存在の神秘

さあ、これからこの二つの組み合わせを考えて行きましょう。それを

考える時に、一番最初に見なければならない点があります。それは、果して私たちは自分自身の存在を全部知り尽くすことが出きるだろうか、という問題です。この点に関して、フロイト以降、人間の中には自分にもわからない無意識の世界があるということが指摘されてきました。その後ユングに至って、だんだんと人間のなかには自分で知っている部分、つまり自分で知られている部分と、同時に、自分の知らない部分、つまり自分にも知られない部分とがあるということが明らかになって来ました。そうしますと、一人の人間の誕生、成長、そして死に向かうという全生涯をみる時に、その中で私たちが知りうる部分というのは非常に少ないのではないか、むしろ知らない自分自身というものの方が大きいのではないか、ということになります。こういう点を見ていきますと、私たち一人一人の存在を見るときに、その存在は何と神秘的なものであるかということに気付かされると思うのです。誰も自分の存在の奥底深く迄知ることは出来ない、同じように、隣人のその心の奥底深く迄知ることは出来ない、ということになります。したがって現在問題になりますのは、デカルトが「我おもう故に我あり」といったことは、果たして正しいかどうかです。この発言に対して沢山の批判が起っています。私が思うゆえに、私があるのでしょうか。そうではなくて、今は、私があるが故に、はじめて私は思うことが出来るのではないでしょうか。思ったり、何かする前に、あなたがあるということ、自分があるということ、このことの方が大事だということになります。しかも、その自分の存在が神秘である、ということになるのです。

このように考えてきますと、今まで私たちが真理と考えていたことに関しても疑問が起ってきます。この点について、キルケゴールが「客観的真理というものはあるのではない。私たち一人一人には主体的な真理しか許されていないのだ。」と言った言葉は、大変有名です。そういう前提のもとで私たちが、いま在るこの状態を、本質的なものと実存的なものとの組み合わせがどうであるか、というところに思いを駆せていきますと、やはり現在は実存的なものを先に見る必要があるのではないかと思うのです。ちょっと難しいのですけども、「私たちはそういう重荷を皆担って生きているものである」という分析が非常に明らかになってきました。たとえば、現在アメリカで活躍していますロロ・メイなどは、anxiety—不安—という言葉を持ち出してきています。あるいは、カール・マルクスは自分の人間観のところでestrangement—疎外—という概念を持ち出してきています。キルケゴールは最後の作品で死に至る病—sickness unto death—という言葉を使ってきています。最近の文学者たちは、ambiguityという言葉を使っているのです。この訳がまた大変なのです。一般的には両義性と訳しています。このambiguityという言葉は、本来はドイツ語のZweideutigkeitの訳なのです。これは、ドイツ語でははっきりしているのですけれども、二つあるうちどちらか決められない状態という意味なのです。ですから、現在私たちが一人の人間を考えていくときに、その人が担っている不安の問題、あるいは、疎外の問題、死に至る病の問題、あるいは二つあるうちどちらか決められない状態であるという問題、こういうことが現在の思想の第一歩であるように思えるのです。ここからはじめて存在を考えることができるのです。

この「二つあるうちどちらかわからない状態」という日本語は何とかならないかとおもってある時、大学四年生の「基督教学」で学生諸君と相談をしました。そうしたらあるクラスでどっちつかず性と訳してくれました。いい訳です。とてもいい訳なのですが、残念なことに反対語が出来ないのです。ambiguity という英語の反対語もありません。英語はどうしているかと言うとただ un-ambiguity といっているだけなのです。この点ドイツ語ははっきりしています。Zweideutigkeit に対して Eindeutigkeit なのですね。二つあるうちどちらか決められない状態から一つに決めるようになるのです。そこではじめをどっちつかず性と訳してしまうと、よい反対語が見付からないのです。そこで仕方がない、どこかの清涼飲料水の広告のように「スカッとさわやかに決まる」、という風に訳したらどうかなと思ったりしているわけです。

これでおわかりになりますように、現在私たちが人間を見るときに、このような実存的な要素というものが全面に出てきているわけです。こういう風に見てみますと、沢山の作品の中にその証拠があるように思うのです。十六世紀ベラスケスという画家が、『ラス・メニーナス』(『女官たち』) という巨大な作品を描いています。現在プラド美術館にあります。この絵はとても面白いのです。真ん中にかわいい王女がいて、その兄弟たちや女官たちが後ろに並んでる絵なのです。その背後にどういうわけかベラスケスが自分の絵を描いています。この絵のとても面白いところは、一人一人の視線が全部違っているという点なのです。つまり、ベラスケスは大変視点の優れた画家でした。女官たちは、本来この王女に仕えているはずの人たちなのに、一人も視点が合わないで皆違ったところを見ているのです。

そしてバルセロナにあるピカソ美術館に行きますと、二階の五つ程の部屋に、驚いたことにピカソの描いた『ラス・メニーナスの illusion』という題の五十八枚の絵があるのです。それは、一人一人が皆違っているところを見ている点を、今度はピカソなりにその一人一人の顔の描写をしているのです。つまり、女官たちはその王女につとめなければならないけれども、現実にはそうでない表情がその一枚一枚の絵に出てきているのです。これは本当に人間には、不安とか、疎外とか、ambiguity ということから免れないことを、非常によくあらわしているのではないかと思うわけです。

こういう例は非常に沢山あります。でも、これはもう一々羅列いたしません。人間存在が担っている重荷という、私たちが人間を考えていく時に、私たちが担っている否定的な側面というものが、現在私たちが読みます文学にしても、絵画にしても、音楽にしても、あるいは、思想の世界に於ても非常に明らかに示されていると思うのです。言葉をまとめてしまいますと、人間存在は常に破壊構造を持つということになるのです。

実存主義者サルトルは、こういう点を非常に早く小説にしています。例えば『嘔吐』というとても汚い題名の小説がありますけれども、一人一人の意味を問うたらわからなくなって嘔吐をもよおす、という意味を示しています。つまり「人間の意味を問うたら意味がない」とサルトルは言うわけです。これはやはり実存哲学の立場の表現だと思うのです。またサルトルは『出口なし』という小説を書きました。これで出口を見

いだしたのはサルトルだけかな？という気がするのです。こういう事を指摘するだけで実存主義者達はおわっているのですが、私は残念なことにそれが出来ないのです。意味がない部分、否定的な側面があるということを見たときに、私たちは、その否定的な側面からもう一度、何が人間を支えることが出来るのか、ということを見なければならないように思うのです。したがって、存在論において私たちは非存在という問題から初めて存在を見ることが出来るという定義があるのですけれども、これにあてはまってくるのです。私たちは、存在が何であるかということを問う時、その存在が非存在という前提のもとに、この存在を見ることが出来るのではないかということのです。つまり、もう少し易しく言うと、私たちはいろんな人生に於て制限がありますが、制限があるとかえってその制限を超えようとする気持ちがおこってくるわけです。だから人生は、どっちつかず性――Zweideutigkeit――なのだけれども、それに本当に直面した時に、どっちつかずの思いから一つの方向へ眼が移って来る、こういう事になるように思うのです。

こういう世界を、パスカルは、『パンセ』の中にとても上手に書いているのです。パスカルは、「人は皆みじめなものである。しかし、人が自分がみじめであることを知ることが出来ることは偉大なことである。」と言っているのです。ここでいわゆる人間のみじめさと偉大さというものとが大変面白い形で組み合わさっていることにお気付きになるでしょう。そういう意味で、私は、人間の存在の問題を考えるとき、やはりこの悲劇的な問題、みじめな問題から始めなければなりませんが、それを本当に受けとめることが出来るのが人間として偉大なことであるということとなり、そしてそれはどこで受けとめることが出来るのかという問題が新しく起こってくるのです。

この問題を考えていく時に、哲学者たちは空間の問題から考えはじめました。一番これを明瞭に述べたのはハイデッガーなのです。彼は「存在と時間」『Sein und Zeit』という作品の中で延々と、存在というものがどれ程、空間というものの中で破壊的なものであるかという事を記しました。私はこれは本当だと思うのです。私たちは、例えば、建物一つをとってみても、あるいは家庭をとってみても、あるいは私たちの仕事をとってみても、あるいはこの教育の業でもそうですが、こうして空間を占めるわけですが、しかしその空間が本当にどれ程の意味を持つのかということを考えていきますと、途端にわからなくなってきます。ハイデッガーが言うように、空間は大変空虚であるということが言えるかも知れません。先程も申しましたように、これは破壊的構造を持つという事になると思います。

この点聖書はどう書いているのか、という事を考えてみます。小預言者アモスの預言が示唆に富んでいるのです。このアモスという預言者が、聖書の中で初めて、自分の母国イスラエルも、他の外国と同じように神の怒りのもとにあるという事を言っているのです。それ迄の聖書の著者たち、あるいは預言者たちというのは、「他の国々は神の怒りの下にたつ。しかし自分の母国イスラエルは選ばれた国家であるから必ず救われる」と言っていたわけです。ところがこのアモスが自分の国イスラエルも、そしてユダも、神の怒りのもとにあると初めて言ったのです。これは画期的なことでした。そしてその後、この考え方が、捕囚期の作者

達たち—たとえば、第二イザヤ（イザヤ書四十章以下の無名の預言者）だとか、エレミヤだとか、エゼキエルといったこの預言者たちに受け継がれ、どのようないかなる空間も、それが神の選民イスラエルであっても、神の怒りのもとにあるということを述べてきました。そしてそれがゴルゴダの丘の上の十字架で最も明瞭な形に示されてきているわけです。

ハイデッガーはここの所でどういう風に展開したかといいますと、彼はこの存在の虚無を指摘して、今度はその中で、ただ時（Zeit）の中での超越という点で初めて存在の意味を見いだす、と言っているのです。しかし残念なことにハイデッガーの作品を読んでみましても、超越という意味が何なのかはっきりとはわからないのです。でも聖書は非常にはっきりと述べています。それは私たちはどうしても空間を占めなければいけません、しかしその空間は破壊構造を持っているのですけれども、ここに時が成就する、時が満ちる——Fulfilment of time——と言うことを述べて来ているのです。

この「時が満ちる」という点をどのように説明しているかというと、例えば「伝道の書」の中に「生まれるに時があり、死ぬるに時がある。種をまくに時があり、刈り取るに時がある」と書かれています。そしてその少し後のところに「全て神のなさることはその時にかなって美しい」と言っているのです。私たちは、そこのところの初めの部分、子供が生まれるということが「その時にかなって美しい」というのは、非常によくわかるのです。ところが「伝道の書」の著者は「死ぬるに時がある」、その時も「神の時にかなって美しい」と言っているのです。ここなのです。時の成就という問題を私たちが考えてくる時に、私たちはやはり、この今非常に否定的な物の考え方の上に非常に大きな光を見いだすことが出来るのではないでしょうか。「時のあとに時がある」のではなくて「時の上に永遠がある」という、これはパウル・テイリッヒ（Paul Tillich）の言葉なのですけれども、そういう考え方が成り立つのです。

3　存在がそのままで満ちる——いま在る祝福

これで結論の方に入ります。「いまここに在る存在がそのままで受け入れられる」というのが、私の言いたい主張点です。いままで述べてきましたように、存在が破壊的構造を持っているということは避けられません。これはちょうど私たちすべて、生きているものは、死を免れないのと同じです。しかしこの破壊構造を持っている私たちがどんなに未完成であっても、あるいは、どんなに疎外されている状況であっても、そのままで永遠にうけいれられている、という事を私は主張したいのです。これが「いま在る意味」ということになります。中世以来のラテンで、Infinitum capax finiti. Finitum non capax infinitum. という非常に有名な文章があります。これは「無限なものが有限なものを包容する。しかし、有限なものが無限なものを包容するのではない。」という意味なのです。その無限なものが、私たち限りあるものを優しく捕えている、ここのところに私はこの問題を解く鍵を持っているのです。

この点を聖書はいろんな形で表現しています。その中の一つ、非常に典型的な例をあげたいのです。それは祝福という字です。このごろは人

が結婚するとすぐこの字が出てきます。これは皇太子の結婚以来かなという気がするのですけれども、これは「おめでとう」という意味にこの祝福という字が使われています。しかし聖書で用いる場合はちょっと違います。イエスはカペナウムで伝道しておられましたが、その伝道に失敗しました。そしてカペナウムのユダヤ人会堂から追放されて、とうとう建物の中では伝道が出来なくなりました。イエスは、イエスの教えを聞きに来た人たちと一緒に丘の上に登られました。そしてその丘の上に登って来た一人一人の顔を見て、「あなたは何と神様から祝福されているのでしょう」と語られたのです。そこには貧しい人、悲しんでいる人、飢えている人、悲劇に悩む人がいました。その人こそ本当に神から祝福されていると言われたのです。

新約聖書はギリシャ語で書かれています。そしてここはマカリオスという字が使ってありますが、イエスが語られたのはヘブライ語であったはずですから、そうするとヘブライ語では、これはアシュレイという字なのです。これは詩篇の本を作った時の最初の第一篇一節の一番最初の字になっているのです。私たちの聖書ですと、「あざける者の座にすわらぬものは、さいわいなり」と訳してあります。しかし実際にはヘブライ語聖書は、この「アシュレイ」という字から始まっているのです。イエスはこの山上の説教でも、丘の上で一人一人に向かって「あなたは何と祝福されているのでしょう」という言葉で始められたのです。

ラテン語ではこの字が beatus という字になり、そして英語でもそのまま beatitudes という言葉にもなり、意味のうえで現在では blessed という字になっています。私たちが人を見るとき人間的な観点でいろいろ判断したりします。そして、また本人もそこで大変な悲劇を味わいますし、また、自分自身が徹底的な孤独を避けられないものであるということを体験することが多いのです。しかしそのままでその人が永遠に祝福されているという事が、ここで大変大事なことではないかと考えるのです。これが、アシュレイ、マカリオスの意味するところです。

この祝福をうけて、その人がそれからそのつぎ新しい空間でどうしたかということを、すぐ私たちは考えてしまうのですけれども、聖書は残念なことにこの人がその後どうなったかということについては殆ど記していないのです。たとえば、罪ある女がイエスの前から祝福を受けて出ていって、彼女は聖女になったのでしょうか。それは書いていません。あのザアカイが、自分の非を悔いて、そして「私はこれからあなたに従っていきます」ということを言っていますが、本当に従ったかということは聖書に書かれてありません。「ニコデモによる福音書」という新約外典があるのですけども、これは聖書正典には選ばれていないのです。

こういう点を私たちは注意深く見ていく必要があると思うのです。存在のもつ破壊構造はそのままなのです。しかし生きる以上担わなければならない重荷もそのままなのです。しかし、そのままで永遠の祝福があるのです。たとえばイエスの語られた「重荷を負うている人は私のもとにきなさい。私はあなたを休ませてあげよう」という有名な言葉があります。私はどうもあれは大工さんだったイエスの家のコマーシャルだったのじゃないかと思っています。これをいろ〳〵書いているのですが、誰も褒めてくれません。どうしてそのように思うかといいますと、「重荷を負うている人は私のもとにきなさい」、そうしたら私たちはイエスの

ころに行ったら全部重荷が取りのけてもらえるのかと思ってしまうのではないでしょうか。よく見ると、イエスはそのような事は言っていないのです。そうではなくて、「自分の作るくびきはあなたに負いやすい」と書いてあるのです。くびき、このごろの学生諸君には「くびきは何か」から説明しなくてはならない時代になりました。物を引っぱっていく時の牛や馬が首にかけているもの、これがくびきですね。ここをギリシャ語で読みますと、「自分の作るくびきはあなたにぴったりあう」という意味になっているのです。だから重荷を引っぱっていく重荷の重さは変わらないのです。けれども、イエスが作られたくびきを負うとその荷が軽くなる、こういう意味であるわけです。私は、やはり一人一人が担っていく重荷というものは変わらないと思うのです。けれどもこの永遠の祝福を受けてくる時に、その重荷は変わらないけれども、重荷の重さが軽くなる、こういう風に言えるのではないでしょうか。そういう点で私たちには、やっぱりこの祝福ということが、どれ程重要なことかと思います。

そしてこういう状況が聖書の中ではいろんな言葉で表現されています。たとえば、神ともにあるとか、霊ともにある（Spiritual Presence）というのも、それをあらわしているのではないでしょうか。霊という言葉は、これは風という語源です。私たち一人一人には風はおのが好むままに吹きます。そして私たち一人一人はどんな状況の中にあっても、そこに風が吹く、それも私たちの期待する形で風が吹くとは限らないのです。しかし私たちに思いもよらない形で風が吹く、その風とともにあなたがあるという、こういう意味がこの祝福という意味にも含まれているのだと思います。

私は「いま在る意味」ということを考えてくる時に、どうしても私たち自身が担っている重荷というものを捨てて理解することは出来ないと思います。しかしその重荷を深く見ればみる程、その重荷とともに生きる力が自分の中にあることに気付かされるのです。これが「いま在る祝福」ということになると思います。「いま在る祝福」に感謝しながらこの一時一時を歩んで行きたいと思いますし、そして私たちは困難な時こそ、「いま在る祝福」というもののもつすばらしい魅力というのがあるように思うのです。パウロが「神は真実である。あなたがたを耐えられないような試練に会わせることがないばかりか、試練と同時にそれに耐えられるように、のがれる道も備えて下さる。」（1コリント10：13）と言っているのです。私はこの言葉が大好きです。このダイナッミクな力を受け入れつつ、歩みたいものです。

これで今日の講演を終わります。どうも有難うございました。

（一九九六年一月十九日　神戸女学院講堂）